

・森榮太（東京都）

水垢の鏡には

狭くふたりに髭を剃り

明るい予言が必要だった

掃除をしていない鏡の前で、肩を並べて髭を剃る。自分たち以外の誰かに未来を提示してもらえたら、眼前の生活まみれの関係から抜け出せるかもしれない。

・太代 祐一（神奈川県）

若白髪きれいいためらう胡麻団子

その人の若白髪をきれいだな、と思う。でもすぐには口に出さない。気にしているかもしれないから。伝えたい。黙々と甘い胡麻団子を頬張る逡巡。

・秋山颯汰朗（群馬県）

眼を擦って富士フィルムの秋渚

富士フィルムの製品で撮影された写真だろうか。夏の賑わいの過ぎた渚の写真。物寂しさが眼を擦るほどに鮮やかに見えるのは性能のせいか、季節のせいか。

・高田皓輔（千葉県）

ちからこぶ確かめ合って雪解けの

ような裏声響かせ合った

獣のように自らの肉体を誇示して、鳥のように裏声を共鳴させて。互いの存在をよろこび確かめ合いながら、命のいちばん眩しい季節は過ぎてゆく。

・牛田 悠貴（東京都）

手に職があつて月でも懐かしむ

多くの職業が失われるなかで手に職があることの猶予にも似た安らぎ。「でも」にはかすかな心の余裕が滲むよう。懐かしむことさえどこか特権的な。

・絵巻（東京都）

缶詰のなかは清潔クリスマス

加熱殺菌が施され無菌状態が保たれている缶詰。ウイルスの蔓延する世界においてもはや缶詰の中以外に清潔で安心できる場所なんてあるのだろうか。

・二上洋之介（東京都）

肩の疲れ

どうしてできた

野菜カレー

自分にとっての

過去のひとたち

自分で作ったはずなのに、どうしてか出来上がっていた野菜カレー。肩の疲れが事後を物語る。数分前の自分もはや自分ではなく過去の他者と言える。

・ともよ（北海道）

トイピアノの

ド

順番待ちの

雪

トイピアノの鍵盤のすべてが指を待っている。ドの次にはレが待つように。雪も空で順番を待ちながら、あ、雪だ、と指さされるのをじっと期待している。

・いちかわ（広島県）

むきえびの関節がわからない

けれどこれから茹でる冬を覚えた

すでに剥かれているえびはどのような姿で生きていたのか確かめようがない。けれどむきえびが食卓にあがる季節の節目が来ていることを私は知る。

・遠乃をと（東京都）

さば缶はうまいらしいとさば缶が

言うのとおなじ構造らしい

イラストのサバ缶から出ている吹き出しを想像する。おなじ構造だと指摘されそうなシーンはこの世に溢れている。伝聞の「らしい」に批判性がある。